

3) セタシジミD型仔貝の減耗調査

橋本佳樹・井戸本純一

〔目的〕セタシジミD型仔貝の大量生産技術はほぼ確立され、現段階では増殖手段として、主となる放流サイズと考えられている。そこで、放流初期における成長量や生残率を解明し、適正放流サイズの資料とする。

〔方法〕本年度は、天然の好適漁場と、客土した試験区において、放流初期におけるD型仔貝の成長量および生残率について追跡調査した。

天然の好適漁場として彦根市松原地先、客土をした漁場として大津市真野地先の各試験漁場内に、分散防止用の鉄筋製枠（1㎡）を設置し、'92年7月13～14日にD型仔貝（殻長0.17mm）を50万個放流した。

その後の追跡調査は、放流直後、5日後、15日後、27日後、38日後および48日後と6回実施し、湖底土の採集は、直径1cmの管ピンを突き立てて行った。枠内のサンプリング回数は5日後の調査までは3本、それ以降は5本とした。

サンプルは、採集後ただちに仔貝をより分けて計数し、殻長、殻高を測定した。なお生残率は放流直後の計数結果を100%として計算した。

〔結果〕真野試験区では、客土区の生残率は、6日後で72%、15日後で33.5%、27日後で25.5%、38日後で15%、48日後で9%となった。対照区（客土前の底土）は、6日後で63.5%、15日後で17%、27日後で14.5%、38日後で10.5%、48日後で1.4%で、客土区に比べ低率であった。平均殻長は、客土区では15日後に0.23mm、27日後に0.29mm、38日後に0.32mm、48日後に0.41mmとなった。また対照区では15日後に0.25mm、27日後に0.29mm、38日後に0.32mm、48日後に0.38mmと、両区に成長の差は見られなかった。

松原試験区は、波浪のため砂の流失止めのポリエチレンメッシュが破損し、生残率については15日目以降、追跡は不可能となった。それまでの生残率は、5日後で87.75%、15日後で42%で、真野の客土区に比較して良好に推移した。成長は、平均殻長が15日後に0.28mm、25日後に0.39mm、38日後に0.46mm、58日後に0.51mmと、真野の客土区に比較して有意な差で良好であった。また昨年度、奥島試験区で同様な試験を実施した結果では、54日後で0.41mm、80日後で0.55mmであり、松原漁場の生産力の大きさが確認された。

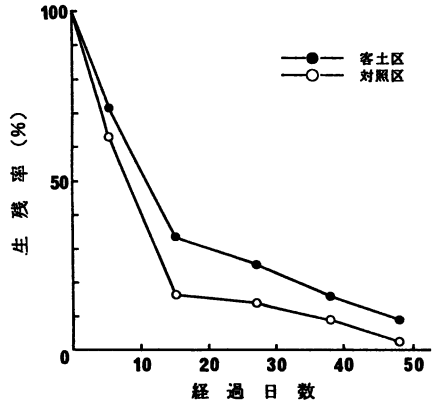
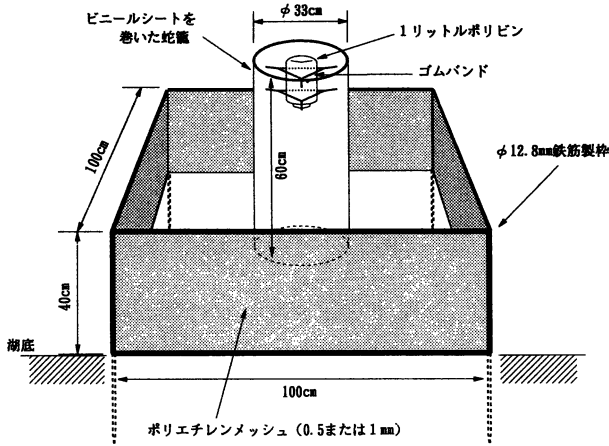


図2 真野試験区の収容器におけるD型仔貝収容後の生存率の推移

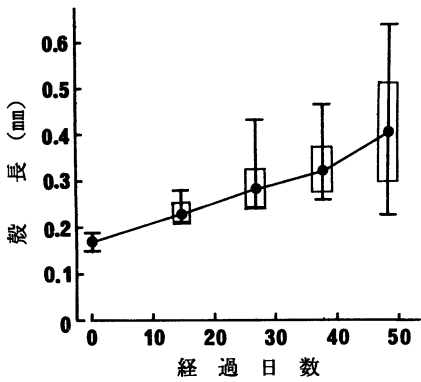


図3 真野試験区（客土区）の収容器におけるD型仔貝収容後の平均殻長の推移。矩形は標準偏差，バーは範囲を示す（n=20）

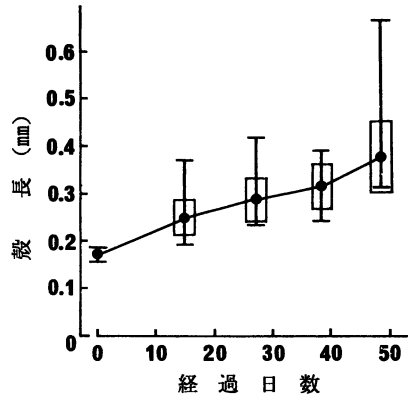


図4 真野試験区（対照区）の収容器におけるD型仔貝収容後の平均殻長の推移。矩形は標準偏差，バーは範囲を示す（n=20）

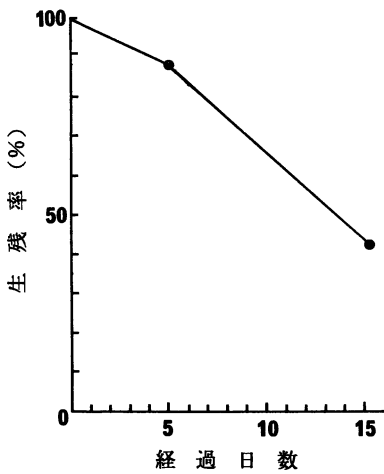


図5 松原試験区の収容器におけるD型仔貝収容後の生存率の推移

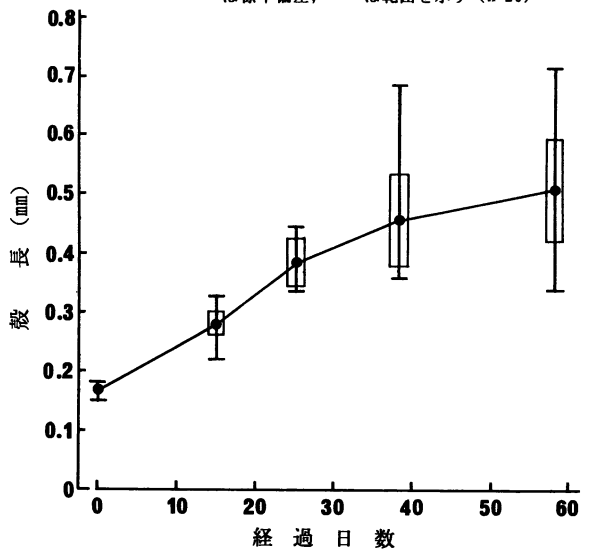


図6 松原試験区の収容器におけるD型仔貝収容後の平均殻長の推移。矩形は標準偏差，バーは範囲を示す（n=20）。